

福井の地域性探る

県と東大研究所 福井でフォーラム

県と東京大学社会科学研究所は十日、福井市の県国際交流会館で、社会科学の研究「希望学プロジェクト」に関するフォーラムを開いた。同研究所のメンバーらが参加するパネルディスカッションなどで、本県の地域性などについて考えた。写真。



希望学プロジェクトでは、地域住民が持つ希望などと、地域社会の抱える問題や特徴と

の関係性などについて探る。同研究所はその後、本県を舞台にそのための調査を本格化さ

せる。今回のフォーラムはプロジェクトへの理解を深めてもらおうと開催。行政や企業などの関係者を中心に約百五十人が参加した。パネルディスカッションには東大関係者と県職員の計五人がパネリストなどとして登場。このうち、同研究所の中村尚史准教授は「福井が社長輩出数が多いことに特に関心がある。産業構造もあると思うが、事業承継の意志が強いのか」と指摘した。

このほか、パネリストは本県の教育や子育ての環境などについて意見交換。また、住民が希望を持つには「地域への誇りを持つ

ことが大切。そのためには地域がどういった歴史を持つのか傳承することも必要だ」などの提言もあった。

(桂知之)